

語られることと、語られないことのあいだ

——言語・表象・教育・社会实践をめぐる分野横断的対話——

投稿募集

三島由紀夫の『金閣寺』(1956)は、幼少期から重度の吃音症に悩まされる青年僧侶の告白、という形式で書かれた長編小説である。主人公の溝口は、吃音により言葉を自由に操れず、「内界と外界との間の扉」をうまく開けることができない。世界から拒まれつづける疎外感の中で、彼はやがて言葉ではなく、金閣寺の「美」を破壊するという行為によって意志をしめそうとする。すなわちこの作品は、「語られない」ものとして排除され、周縁化され続けてきた主人公の実存体験と内面世界を、三島独特の華麗な文体によって、「語られる」ものに変換しているのである。

『金閣寺』は、三島の「滅びの美学」を全面的に展開した作品として理解されることが常である。だが、言語教育や通訳という角度から、これを読み直すこともできるであろう。あたかも世界から拒まれるかのように、自由にならない言葉に跳ね返され、「語られないこと」のほうへと押し戻され続ける実存体験は、言語学習者や通訳を必要とする人々が直面するものだからである。

言語教育や通訳は、「語られること」と「語られないこと」のあいだに立ち、両者を仲介する営みである。それらは、「語られないこと」として沈黙の中に押し込められてしまう人々の声を、「語られること」へと変換し、他者へ届ける手助けをする役割を担っている。しかしその過程では、あらたな排除や禁忌、規範と序列の構造が作り出されることがある。

たとえば言語教育の現場で、言葉を流暢に操れず、隅に隠れて押し黙ってしまうような学習者は、しばしばたんに教育・訓練によって克服すべき問題対象として認識されてしまう。また、言語教育の教材や現場には、構造的に排除されるものがある。ある種の政治・社会・宗教にかかわる題材と批判的言説、学習者のアイデンティティやプライバシーにかかわる話題等である。こうした要素が「語られない」ことによって、教育現場が成り立っている側面がある。ほかにも、学習対象言語の背後にある、特有の規範や禁忌、コミュニケーション上の習慣を、学習者が過剰に内面化することで、本来は語りえたはずのなにかが抑圧されてしまうこともあるだろう。

そして、通訳者は当事者の語ることをすべて「代弁」するとはかぎらない。なにが代弁され、なにが代弁されないかは、通訳者の属人的要素のほかに、その場の雰囲気や人間関係、そして政治的・社会的・文化的な権力構造によって容易に左右される。たんに代弁されないことによってだけでなく、むしろ代

弁されることによって逆に語られなくされてしまうものもあるのである。

これは、言語教育や通訳だけでなく、人文社会科学のさまざまな学問領域、さらには社会運動の根幹にまでかかわる問題でもある。たとえば、台湾の近現代史は、政治権力によってさまざまな人々の声が抑圧・周縁化されることの繰り返しであった。そのため民主化以降は、多くの社会運動や、歴史学、社会学、文学研究等の学問研究において、こうした「語られない」ものとされてきた声を、「語られる」ものへと再転換する試みが続けられてきた。

文学作品や映画、アニメーション等を論ずる表象文化研究においても、近年は多くの研究者によって、作品そのものには書きこまれていないものや、周縁的・断片的にしか描かれていない要素に着目する方法が採用されている。そもそも、小説や映画等の表象作品は、日常生活のコミュニケーションの中で疎外された人々が、自分なりの世界を構築したりそれを表現したりするための受け皿として機能してきた側面もある。

ほかにも、今日、世界各国の研究機関では、研究業績の優劣を単一的な評価基準によって測る、知の官僚システムが強化されているが、そのことによって「等級分けされた審査付き学术论文」の枠組には収まらないようなものが、「語られないもの」として排除・周縁化される構造も生まれている。学術システムそのものを批判的に問い直すうえでも、「語られることと、語られないことのあいだ」をめぐる問題意識は欠かせない。

従来、こうした諸問題については、それぞれの領域の枠内で個別に議論がなされてきた。しかし、一貫した問題意識のもとに討論する分野横断的なプラットフォームは作られてこなかったといえる。そこで本シンポジウムは、台湾と日本を主要な対象とする、言語教育・通訳学・コミュニケーション学・言語学・歴史学・文学研究・大衆文化研究等の専門家を招待し、この問題を総合的に再考察することにした。各領域の専門家による基調講演と研究発表、実践報告のほか、総合討論の場を用意する。

留意しておきたいのは、「語られること／語られないこと」が、きれいに分離できる二項対立ではないという点である。一見何かを饒舌に述べているようでも、実は何も語っていないことがあるし、また沈黙の中にも、人に語りかける何かが含まれていることがある。語ることによって、失われたり抑圧されたりしてしまう物事もあれば、語られないことによって、逆に力を獲得するものもある。両者は対立しつつも、相互に浸透し、依存し、時に反転し、入れ替わるという、矛盾と逆説にみちた複雑かつ動的な相互関係にある。

本シンポジウムでは、こうした点にも注意を払いつつ、「語られることと、語られないことのあいだ」について、それぞれの分野の専門家による、領域の垣根を超えた活発な議論が展開されることを期待したい。

一、募集項目

1. 一般研究発表
2. ポスター発表
3. パネルセッション

二、主催

東海大学日本語文化学科、
愛知県立大学国際文化研究科国際文化専攻コミュニティ通訳学コース

三、会場

東海大学 茂榜廳（茂榜ホール）

四、開催日

2027 年 3 月 13 日（土）

五、基調講演（日本語－中国語の同時通訳あり）

木村 護郎クリストフ 一上智大学外国語学部ドイツ語学科教授兼外国語学部長
陳 國偉 一國立中興大學台灣文學與跨國文化研究所優聘副教授兼文學院副院長

六、特別パネルセッション：（日本語－中国語の同時通訳あり）

（仮）コミュニティ通訳の現場で語られること／語られないこと

一台湾・日本の警察通訳と医療通訳

ミランダ・ライ（頼貞慧）－RMIT 大学（オーストラリア）通訳・翻訳学准教授

吉田 理加 一愛知県立大学大学院国際文化研究科准教授 ほか

七、発表および申込

1. 使用言語：日本語または中国語
2. 発表時間：口頭発表（質疑応答を含め 30 分）／パネルセッション（60 分）／ポスター発表（昼休み時間帯）
3. 要旨提出期限：2026 年 8 月 31 日（月）までに、下記フォームよりご提出ください。

<https://ithu.tw/GtnUi>



4. 要旨の文字数制限：日本語は 500 字以内、中国語は 400 字以内とします。

5. 要旨審査結果：2026 年 10 月 2 日（金）までに電子メールにて通知いたします。（通知が届かない場合は、お手数ですがお電話にてお問い合わせください。）
6. 論文原稿提出期限：2027 年 1 月 15 日（金）まで
7. 論文原稿（Word および PDF 形式）を、下記にてご提出ください。

2027 東海日文系国際学術シンポジウム論文原稿提出フォーム

※<https://forms.gle/WVexEg8DWJoPTsKx5>

（ファイル名：名前_題目名）

八、原稿フォーマット

1. 使用言語：日本語または中国語
2. 分量：8～12 ページ（参考文献・資料・図表等を含む）
3. 用紙：A4、横書き（30 字×40 行）
4. 余白：上 2.5cm／下 2.5cm／左 3cm／右 3cm
5. フォント：
日本語：MS 明朝／中国語：新細明體／英語：Times New Roman
6. 注：脚注（Word 機能使用）
7. 構成：
論文題目（14pt）
＜ 1 行空ける ＞
氏名（12pt）
＜ 1 行空ける ＞
所属・職位（12pt）
＜ 1 行空ける ＞
本文・参考文献（12pt）
＜脚注は 10pt＞

九、その他

1. 大会論文集について

本国際シンポジウムで発表された論文は、電子版の「会議論文集」として集約し、大会当日にダウンロード方式にて公開・提供いたします。

2. 大会後の学術ジャーナルへのご投稿について

本大会終了後、紙媒体による論文集の別途刊行は行いません。つきましては、皆様の優れた研究成果を、本学科が発行する学術誌『多元文化交流』第 19 号へ、ぜひ奮ってご投稿いただけますようお願い申し上げます。投稿先メールアドレス：thujp.kiyo@gmail.com

3. 投稿規程および締切日について

① 査読付き論文（一般査読論文）

備考：所定の査読料（審査費用）のお支払いが必要です。

投稿締切日：3 月 30 日（必着）

② 査読なし論文（一般寄稿論文）

備考：審査はございません。本誌の学術ジャーナル執筆要項（フォーマット）に準拠し、校正を完了させた上でご提出ください。

投稿締切日：4 月 30 日（必着）

【お問い合わせ】

担当：張瑜珊（学科主任）

TEL：04-23590121（内線 31701～31703）

FAX：04-23590258

住所：台中市西屯区台湾大道四段 1727 号

東海大学日本語言文化学科

E-mail : japan@thu.edu.tw

URL : <http://japan.thu.edu.tw>